小山工業高等専門学校研究紀要
第 49 号(2016)　　5－ 8

国際交流事業が及ぼす英語学習への モチベーションについて

岡田　晃[*1]

English Study Motivation Cultivated by Exchange Programs

Akira OKADA

The purpose of this paper is to report various exchange programs which have been held in this college for the past several years and student's motivation for English through the programs. In addition, I will give some of my own views about what our students have to do before short-stay international students visit us or our students go abroad for English study program.

KEYWORDS : English study, study motivation, exchange programs, study abroad

1. 初めに

本稿は、小山高専で行われている数々の国際交流事業を紹介し、その事業における学生の英語学習、主にコミュニケーションに対するモチベーションに関する報告を行うことを目的としている。また、数多くの事業をより充実したものにしていくにはどうしたらよいか、という課題に対する独自の見解を示すことを目的としている。

昨今、本校では国際交流事業が活発化してきている。それに伴い、本校学生が海外からの来校留学生と交流を持つ機会が増えつつある。しかし、そのような状況であるにもかかわらず、英語におけるコミュニケーション能力向上に前向きに取り組もうとしている学生は決して多くはない。

このような状況を受け、海外からの留学生が来校する前に自己紹介や学校紹介プレゼンテーション等の事前学習の必要性とモチベーション維持について見解を示していきたい。

2. 本稿執筆の背景

昨今の国際交流事業の活発化に伴い、学生が海外からの留学生と英語で会話をする機会が増えている。しかし、普段の授業の中で学生と接していると、以下に示すように学生の英語学習に対するモチベーションが高いと感じられないのが現実である。

- 英語の必要性を感じている学生が少ない。
- 必要性を認識していても、英語を使う機会が少ない。
- 英語を使う機会があっても、恥ずかしくて（失敗を恐れて）英語を使えない。

これらはどの高専でも抱えている課題だと思われるが、我々教員が理想として考えられるものに以下のようなものがあるかと思われる。

- 将来を見据えて、英語学習に対する意欲を向

*1 一般科（Dept. of General Education），E-mail: akira.ok@oyama-ct.ac.jp

上させる。

- 国際的な広い視野を持つ⇒日本中心的な考えをしないようにする。

これらの理想はほんの一部だと思われるが、理想と現実の差をどのように埋めていかなくてはならないか。この問題点を避けて英語学習に対するモチベーションを考えることはできない。では、学生に対し、実際にどんなことをやるべきなのか。３つほど挙げてみたい。

① 英語の必要性を実感させる。
② 英語が通じた時の嬉しさを知ってもらう。
③ 日本文化と海外文化の相違を認識させる。

海外学生と交流を行う前に、また自らが海外に行く前に事前準備をしっかりさせることが大切であり、そうすることで、英語でコミュニケーションをとる際の自信に繋がっていくであろう。

まずは、本校の国際交流事業を確認していきたい。

３．国際交流事業について

近年の世界経済のグローバル化に伴い、日本のあらゆる場面においてもグローバル化が進んでおり、その人材育成が求められている時代となっている。高専機構でも実践的な技術者育成を目指す取り組みとして国際シンポジウムの実施、海外インターンシップ等を通じ、グローバルエンジニアの育成を重点課題としている。このような機構の考えの下、我々高専教員もグローバル人材育成に向けた取り組みを積極展開していかなくてはならない。

まずは、本校の取り組み状況を以下に示していく。

３．１　香港 IVE 提携交流

香港 IVE との協定交流は今年で４年目を迎え、20 名を超える香港学生が来校した。毎年行われている主な交流内容は、本校学生をサポート要員とした日光観光、東京観光、企業見学等、多岐に渡っている。最近では一層の学内交流発展を目指し、HR 交流、球技大会参加等も行われるようになった。本事業の興隆は、各教職員の連携が取れるようになってきたことに加え、全学生の意識が国際交流に少しでも向くようになってきたことが１つの要因かもしれない。

また、本校からの香港訪問は３年目となり、今年は 14 名の学生が現地の施設を訪れ、研修を行ってきた。さらに、派遣時には後援会の援助に加え、昨年度採択された JASSO 奨学金も併用されるようになり、学生負担金が軽減されることとなった。

今年度新たに覚書を交わし、次年度以降も継続が決定したことを受けて、両校のますますの発展を目指し、改良点を見直していくことが求められるであろう。

３．２　海外語学研修

当事業は、英語によるコミュニケーション能力の向上と異文化理解を目標に、平成 10 年３月に始まった海外英語研修プログラムである。毎年春休み期間を利用して２週間のホームステイをしながら約 15 名の学生が参加している。研修先は、当初はオーストラリア、続いてイギリスであったが、最近ではアメリカ西海岸のシアトルやバークレー・サンフランシスコを訪れ、世界的に有名な企業（シリコンバレーにおける IT 関連企業など）の見学を盛り込んだ内容となっており、参加学生からの評価も高いものとなっている。

先の香港 IVE との提携交流とは違い、実際に海外の語学学校内で世界各国から英語を学びに来ている学生たちと一緒に語学学習をすることでコミュニケーション能力を向上させるとともに、様々な異文化交流を通じて日本人独自の見解だけではない、幅広い視野を得ることができる。ただし、開催時期や内容の選定を含めて、修正すべき課題もある。今後も続けていく取り組みなので、改善点を見出し、より良いものにしていく必要がある。

３．３　フランス技術短期大学（IUT）、及びメキシコグァナファト大学との提携

フランス技術短期大学との提携事業は今年で２年目を迎えた。４月から約３か月間、インターンシップとして平成 27 年度は２名、平成 28 年度は３ 名の学生を受け入れた。本来の長期留学生とは違い、限られた期間内で研究室に配属され、指導教員の指導を受けながら得た研究成果を報告会で発表することになっている。期間内は同じ研究室内の学生とはもちろん、英語授業への参加、校内アクティビティ参加などを通じて、本校における他の学生とも交流機会があり、異文化交流の一端を担っている。派遣については、今年度より始ま

ろうとしている。

一方、メキシコグァナファト大学との交流については、平成27年度に覚書を結んだばかりであり、実際の交流は平成29年度以降となる。どのような内容になるのか、時期がいつごろになるか、現時点では不明な点が多いが、新たな交流機会が増えるという点では推進していきたい事業である。

ただ、受け入れ時期や派遣時期、受け入れ時の配属先の選定など、抱える問題はまだ多い。

３．４　その他

本校では毎年、長期留学性を三年時より受け入れている。この取り組みが始まってから実に 30年以上が経過している。これまでにおよそ100名以上の学生が長期留学生として来校し、卒業していった。出身国は東南アジアの国々が多く、卒業後は日本の大学に進学するのが通例となっている。学内での学習に加え、留学生交流会、ホームステイ経験などにできるだけ参加し、充実した留学生生活を送っている。

また、小山高専と言えばロボコンが有名であるが、本校のロボコンチームはそのロボットの技術力の高さに加え、英語による実演実績も持っている。先の香港IVE学生やフランス学生の来校時には必ず実演を行っている。学生訪問だけでなく、海外から本校を視察にきた来校者には必ずと言っていいほど英語実演を行っている。英語実演は校内に限ったことではない。平成25年アメリカニューヨーク・ボストン実演、平成26年インターナショナルスクール実演、同年SLASH ASIA参加が挙げられるが、特にアメリカでの実演は2週間で４つの大学を回る大掛かりな遠征だった。

以上が、主に本校で行われている国際交流事業であるが、現実的な学生の英語コミュニケーションに対するモチベーションとなるといくつか問題点が出てくる。その問題点を以降整理していきたい。

４．学生のモチベーションについて

本校における国際交流事業は毎年その重要性を増しており、今後も継続して行われていくであろう。その背景にあるのが学生の英語のコミュニケーション能力の育成である。しかし、現実的に多くの学生には以下のような姿勢が見られる。

- 実際に交流を開始する前は意欲が見られるが、交流後は意欲が低下してしまう。
- 実際に交流に関わらない学生は単なる１つのイベント事としてしか考えない。
- 切羽詰まった状況にならないと行動に移せない。

以上のような行動はどの高専学生にも少なからず見られるものではないであろうか。英語学習へのモチベーションを少しでも維持するためにはどのような取り組みが必要となってくるであろうか。

５．モチベーション維持のための取組

学生に限らず、一般的に、必要に迫られなければ行動を起こさないというのは大人にも当てはまる現象だが、それでも英語の必要性を感じている学生は多い。そこで、どうしても英語を使わなくてはならない状況を作り出すことが不可欠になってくる。海外に行けばそのような状況に身を置くことになるので、学習しなくてはならないという意識が生まれるであろう。しかし、誰もが海外に行けるというわけではない。学生の英語コミュニケーション能力を涵養することが求められている昨今では学内での取り組みを熟慮しなくてはならない。

先に述べたように、本校の国際交流は気運が高まりつつあり、海外からの短期滞在留学生が増えている。そればかりか、海外機関との提携事業も増えているので、学生自らが海外へ行く機会も増加傾向にある。さらに、学内企画のみならず、自ら長期休暇時期を利用して、短期で海外ホームステイを経験したり、海外渡航意識が高まっていることは否定できない。

このような状況を垣間見て、少しでも学生たちのモチベーションを高くするには、交流（渡航）前の事前準備を徹底して行うことが重要ではないだろうか。以下にその事前準備の一例を記す。

- 事前準備の一例

①　スピーキングについて

自分に関わる様々な紹介文を書かせ、発表できるようにする

例：自己紹介、家族紹介、学校紹介、学科紹介、研究内容紹介など

②　リスニングについて

課題用リスニングCDを配布し、書き取りをやらせる。

上に記したものは、どれも単純なものかもしれない。しかし、このような単純作業の繰り返しで少しでも気運が維持できるようサポート体制を続けていかなくてはならない。

また、今年度よりイングリッシュカフェを定常化させている。内容面でばらつきがあるものの、今後は外国人講師を招くなどして内容を充実したものにしていく必要がある。

６．結論

これまで、本校の国際交流事業を説明し、学生の英語コミュニケーション力の維持について話をしてきた。以下に本稿における結論を記す。

①　英語の必要性について
⇒目的意識の明確化
「簡単な日常会話ができる程度の会話力」から「簡単な受け答えができるようになること」への発想の転換
②　英語を使う機会の増加
⇒学内イングリッシュカフェ実施、更なる交流イベントや留学の充実、市内交流イベントへの参加など。実際に体験してみないとわからない世界に入り込ませる。
③　失敗を恐れない（積極的な姿勢の育成）
⇒先生自らの経験などを語る。

「失敗を恐れるな。そんなものはないのだから」、「学んでから挑戦するのではない。いきなり挑戦して、失敗から学ぶ」という考えのもと、積極的に取り組ませる姿勢を養うことが必要である。

つまり、「努力の継続性」、「無駄な努力などないという考え」を持たせたい。

何より、学生たちと直接関わっている私たち教員がこのような姿勢を見せることが必要であると考えている。

謝辞

本稿を作成するにあたり、国際交流関連事業に携わっていただいた本校の先生方に協力を戴きました。心より感謝致します。

【受理年月日　2016年 9月29日】